

「お父さんコロナになった。」

七月六日水曜日の夕方、雨に打たれながら帰宅した私に、母がこう言った。私はその瞬間から頭が真っ白になった。突然、胸がざわつき始め、不安に襲われた。

その日から、地獄の自粛生活が始まった。

七月七日木曜日、午前十一時、母と兄と私の三人は、病院にPCR検査を受けに行った。今までに病院に行った時と違って、病院の中の受付には入らず、車の中で待つらしい。病院に到着して、駐車場で待っていると看護師がやって来た。

「この容器に、線のところまで唾液を入れてください。」

と言われた。緊張のせいかわ、口の中が乾いていて、唾液が思うようにならない。心の中で、「やばい」と思いながら周りを見ると、みんな苦戦していた。看護師に見守られ、無事に検査を終えて帰宅した。結果は、夕方に電話で伝えられるらしい。結果が分かる夕方までの時間、母も兄も私も、三人とも思い込みのせいなのか、気分が重く、謎に頭が痛いような気がしていた。

午後五時頃、母の携帯が鳴った。その場に張りつめた空気が流れた。

「もしもし」

母が電話に出た。

良い結果であってくれ、と心の中で願った。いざ結果が出るとなると、すぐドキドキした。やっぱり嫌だ、コロナになりたくないが無駄にあがきたくなかった。そんな私の横で、兄はのんきにゲームをしている。そんな場合かよ、と思った。余計に気持ちがそわそわし

てきてしまった。少し離れたところで電話をしていた母から、母のいつもの明るい声が聞こえてきた。電話を切った母が、私達のところへ戻って来て、

「三人とも陰性です。」

と言った。その瞬間、体が軽くなった気がした。予想外だった。家族の一人が感染してしまつたら、もううつついていてもしょうがないかなど、若干諦めていたからだ。ひとまずは安心できた。

しかし、大変なのはここからだ。感染者である父と一つ屋根の下で暮らすのだ。気をつけなければいけないことがたくさんあるからだ。まず、二階の各自の部屋から一階に布団を運んだ。これからは一階で生活することになった。父は、二階の一室で生活することになった。幸いなことに、鈴木家には二階にもトイレがある。父が一階に下りてくるのは、入浴時のみということになる。そこで、感染対策を万全にするために、父が入浴する時間は、私たち三人でドライブに行くことにした。車の中で、みんなの好きな曲を流し、他愛もない話をして、盛り上がった。普段は夜にドライブなんてすることはしない。とても新鮮でちよつといい思い出になった。新城まで遠出のドライブを試してみたり、豊川稲荷の周辺を巡ったりした。地元なのに知らなかった店や街並みに、私は、

「え！豊川めっちゃエモいやん。」

と嬉しくなった。しかし、自宅待機のステイホーム期間中、唯一の楽しみは、この夜のドライブだけ。つらい。つらすぎる。外で思い切り遊べるのがどんなに幸せか、改めて身に染みた。外食やテイクアウトもできない。毎日母の手作りご飯。とてもとても美味しいけれど、やっぱりマックも食べたい。こんなこと母に聞かれたらまずいけれど、やっぱり本音はマックが食べたい。ポテトが恋しい。

でも、一番つらいのは父だ。普段の父は、釣り好きで、週末はかなりの確率で釣りに出かける。食欲旺盛でよく食べる。成長期の兄よりもよく食べる。こう言うと、かなり活発なイメージをもたれる

かもしれないが、そうでもない。どちらかというとクールなタイプだ。だが、あまりにも静かなので、存在を忘れかけてしまっていた。たまに一階まで聞こえてくる咳の音で、彼を思い出す。

「早く良くなりますように。」  
心の中で願った。

鈴木家ステイホームの期間は、一週間だった。その間、授業は毎日六時間、一週間で三十時間ある。私は数学が苦手なので、一週間授業を受けられなかったという事は、私にとって、ピンチではない。復帰したときに授業についていけないのか不安になった。普通に授業を受けていても分からない時があるのに

「このままやっていけるのか、大丈夫か、私。」

と何度も考えた。テストができなかったらどうしようと心配が大きくなるばかりだった。でも、その心配はなかった。一週間、毎日、友達が手紙をポストに入れてくれたり、その日の授業でとったノートをLINEで送ってくれたりした。とても有難かった。涙が出そうになった。というのは言い過ぎだが、本当に友達の優しさに感動した。

現在、全国でコロナウイルスがまん延し、感染者が増え続けている。毎日、ニュースで感染者数が発表されるのが、当たり前の日常になっている。いつ、どこで感染してもおかしくない状況だ。今までは、どこか他人事のように思ってた。ニュースを耳にしていたが、身近な家族が感染して、初めて危機感をもった。手洗い、うがい、消毒など、自分にできることはしっかりやることの大事さを身をもって感じた。鈴木家のステイホームは終わったが、夏休みになっても、むしろ、夏休みに入ってより一層、コロナの感染者数は増えている。このまま終息せずに、永遠に続いてしまったらどうなるのだろうか、という不安は当然ある。インフルエンザのように季節性であれば、まだ良かったが、コロナウイルスは年中無休だ。休みをとっていただきたい。本当に勘弁してほしい。しかし、この状況下でも、生き

ていくしかない。自分にできる最善の感染対策を行い、周囲の人と支え合いながら生活していきたい。